少数言語の次世代

―タイで出会ったモン語の若い担い手―

和 田 理 寛 *

最古のタイ語資料は 13 世紀末とされるが，それより数百年遡るモン語（Mon）刻文がタイ国内各地でみつかっている．タイ系の政権が勃興する以前，中部地域にはドゥヴァーラヴァティー，北部にはハリプンジャヤといったモン系の勢力があったと考えられている．その後も，隣国ミャンマーからのモン移民を受け入れつつ，近年までタイの地にはモン語世界が点在していた．

ところで今日のタイでは一部国境地域を除き，若い世代が少数民族のモン語を話す光景はほとんどみられなくなった．仏教僧がモン語の読み書きを教え，少年たちの音読練習の声が村の僧院に響いていたのも現在の年配者の経験に懐かしい昔の話である．そうしたタイ化に抗し中高年層のほんの一握りの人たちが言語の継承運動を展開するが，なかなかうまくいかない．彼らは「周りには愚か者と言われるけどやらずにはいられなくてね」と自嘲的である．モン語資料の歴史が古い分，その自負と今のモン語の非経済性との隔たりが，彼らの焦燥に輪をかけているようにもみえる．

そんななか，フィールドで 2 人の変わった若者に会った．彼らは意図してか否か，モン文語の現在最後の継承者であった．

2 年前，私はバンコク隣県の某モン寺で厄介になっていた．旧正月である灌水祭（水かけ祭）の日が目の前に迫ると，夏の気怠さの来襲を祭へと昇華させるがごとく村は華やいだ空気に包まれる．

ちょうどそのとき比丘（びく）として同じ寺院に止住していたのがセーム君であった．彼は 20 代になったばかりだが，モン語を流暢に話せるという点で同世代の他の僧のなかで特異であった．

我々の共通点といえばモン文語学習者であることだ．彼は，出家前に村の年配女性チャラート氏（70 代半ば）からモン文語を教わった．チャラート氏は女性ながら，幼少期に自宅で父親からモン文語を学んだ珍しい例であり，その能力は男性に劣らないばかりか村でも卓越している．セーム君は僧の身分となってから，女性と距離を置く必要もあり，寺院にて住職から一対一でモン文語を教わることになった．同村のモン文語教育が絶え随分経った今日にあって，彼は教師に自ら懇願する形でその学習に取り組んでいた．

ところでこの寺院にはモン文語に長けた年配僧，ングアン師（70 代後半）がいた．私

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真 1　セーム君

写真 2　ングアン師

写真 3　チャラート氏

は，寺院住まい中の面倒をみてくれた他の僧との折り合いもあり，同じ寺にいながらなかなかングアン師に会いに行けずにいた．それにングアン師は若年者にとって「おっかない」存在であった．それはセーム君にとっても例外ではなかった．しかし，それは我々の先入観に過ぎなかったようである．ある晩，私が仏教儀礼についてひとりで話を伺いに行くと，師は大変親切に解説してくれた．笑顔はなくとも，それは内面の優しさとは無関係であるようだった．セーム君はいつしかングアン師の弟子となり，モン語の貝葉書を使って学ぶようになった．彼はングアン師の説法すなわちモン語の本生譚（ジャータカ）読み聞かせの技術に強く憧れていた．

夏が終わり，雨の季節になると僧は 3ヵ月間僧院に籠って修行に励む．出安居（あんご）の儀礼は，この雨季籠りの終わりと，涼しい乾季の到来を告げる．この寺では 4 日間かけて国民的文学『布施太子本生譚』全 13 章を僧が交代で読み上げる．乞われれば妻子までも差し出す太子の物語に，白衣の年配持戒者たちは床に直接座り合掌の姿勢で耳を澄ます．今年出家した若い僧たちも出番をもらいタイ語で各自担当の章を読み上げる．もともと一時

出家を予定している彼らだが，還俗前に，この雨安居を終えて一段と僧らしくなったその姿を村の篤信な年配者たちの前で披露するかのようである．

最終日，第 12 章の担当はセーム君である．今年，彼は若い僧で唯一モン語による読み聞かせを行なうことになっている．立派な説法用の高台に座った師を見上げる持戒者たちの最前列には，かつてモン文語を教えた在家女性チャラート氏が丸眼鏡の奥にこそばゆい笑みを湛えている．モン語説法の節回しも冴え，雨安居を通してングアン師と重ねてきた勉学の成果を発揮する場となった．国境地域以外のタイ国内において，今日，若い僧のモン語説法の機会に会うことはまず無いだろう．

一方，ングアン師は止住僧のなかで最多の 4 章分の担当が予定されていた．しかし，今年は結局最終日まで師が姿をみせることはなかった．師は出安居直前に体調を崩し急遽入院していた．説法台の後ろにはングアン師の名前の入った説法スケジュールが置かれたままである．そして，セーム君の説法のちょうど 1 週間後にングアン師は逝去した．突然の訃報であった．

所変わり，ここはバンコクから 650 km 以上北上したチェンマイ隣県の某モン集落である．モンの女王チャーマデーヴィーの伝説が残る町にほど近い．今から 4 年前，私は友人たちとともに 3 人で村を訪問した．誰も知り合いのいないなか飛び込みで向かった先で地元の人から親切にしてもらったことが記憶に新しい．

このとき知り合ったトー君は当時高校 2 年生であった．彼は持ち前の人当りの良さを発揮して，村内の案内に留まらず，近くに有名な仏塔があるからと半日がかりで連れて行ってくれた．このトー君は流暢にモン語を話す．さらに珍しいことに，この年代でモン語の文章をかなり読むことができる．

彼にモン文語を教えたのは年配男性在家者のブンミー氏（70 代後半）である．この地域は，寺院での男児に対するモン文語教育が早くに廃れ，ブンミー氏の子どものころには既に行なわれていなかった．そのため，村でモン文語に精通した者は年配者でもかなり限られているようである．ブンミー氏自身は青年期に伝統薬の民間治療師からモン文語を教わっている．

我々がモン語教育に関心を寄せると，トー君はブンミー氏に連絡してくれると言った．後日，町で療養中であったブンミー氏が，我々と会うためわざわざ村に戻ってきてくれるという一報を受けて我々は再び村へ向かった．ブンミー氏は定年後，地元のこの村で子どもたちを対象に無償のモン文語塾を開いた話を聞かせてくれた．ただし，他の集落同様，集まった学生は徐々に減っていく傾向にあった．結局，モン語を話せる世代もいなくなり，時勢に逆らうことはできずおよそ 7 年後には閉室した．それでも一部の学生にはモン語の読み書きを伝えることができたと嬉しそうであった．そのなかで最も優秀だったのが当時小学生のトー君である．

私がこの村を再び訪れるのはそれから 4 年後となった．民族文化復興運動の全国組織であるモン青年会が例年村落持回りでモン民

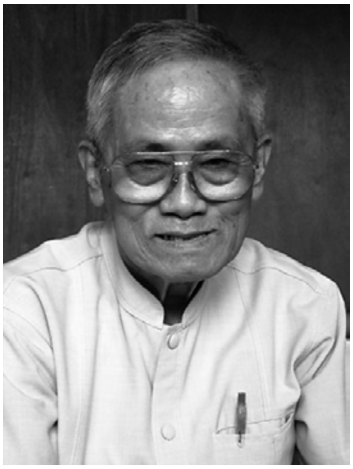

写真 4　ブンミー氏

写真 5　トー君

族記念日を開催しているが，今年はバンコクから最遠地のモン集住地であるこの村が選ばれた．私もこの祭典に参加した．北部の小さなモン村に全国各地から会員が集い，各々が華やかな衣装に身を包んで 1 年に 1 度の祭典を作り上げていた．

あの優しいブンミー氏にもう一度会いたかったが，残念ながら氏は既に亡くなっていた．一方のトー君は，夕闇に包まれた祭典舞台のうえで舞踊の中央先頭に立ち，地元の子どもたちを率いていた．また，ミャンマーから来たモンの若者はタイでは外国人単純労働者として他者扱いされがちであるが，祭典に訪れたその団体一行を，トー君は自宅に招き宿泊場所として提供していた．世話好きも穏やかな性格も相変わらずであった．

一方，セーム君にはあのモン語説法のとき以来，今日まで再会を果たしていない．彼は出家生活をもう少し続けたかったが，果樹園経営をする両親を手伝わなければならないため，既に還俗したという話だけは聞いていた．

あの説法デビューから 1 年と数ヵ月経ったある日，私は，セーム君のいる村の隣村で他のモン寺の出家式に参列していた．その会場で地元の人に，在家者が出家予定者を祝福するバ・アヤン儀礼について尋ねていると，「そういやあ，向こうの方じゃあ，若いやつがバ・アヤンをやっているらしいな」という話を聞いた．バ・アヤンの出来る若者など聞いたことがなかったが，すぐにセーム君のことであると気が付いた．彼がまだ僧籍にあったころ，バ・アヤンの執行者である年配在家者の自宅を一緒に訪問し，モン語で書かれたその文句を複写させてもらったことがある．そうか，還俗した後も村の儀礼に携わっていたか，と思うと，神妙な顔をしてモン語を誦出する彼の姿が浮かんできた．

この青年 2 人は面白いことに，なんとない関心からモン語の担い手となったようだ．名誉欲や経済的な理由はおろか，言語継承や民族主義のためですらないようにみえる．し

たたかでも，抵抗に身を焦がす主体でもない．それでも，彼らは，いつの間にか感覚が慣れてしまった普段の日常について，それが拠って立つ社会の基盤や，緩慢な変化の彼方に忘れ去られる過去があることに気が付かせてくれる．そして 2 人は，研究書のような専門家同士の閉じた言論の世界と異なり，自らの存在をして，誰にでも手の届くところに批判的な視野をもたらしてくれる．

「民族多様性」の言葉の中にみる人々

──勝ち組か，あるいは負け組か──

佐井　旭*

自身の故郷である上海から日本に帰国してから，わずか 2 日後の深夜 1 時，ボルネオ島サバ州コタキナバルに降り立った．手荷物検査の担当者は，きちんとモニターを見ているのかどうか覗き込みたくなるほど，モニターから目を離して同僚と歓談しており，空港からしてアットホームな雰囲気である．もの寂しい出口を潜り抜けると，モワッとした，湿度が高く泥臭い空気が気管に流れ込み，それが長旅で疲れた身体に追い打ちを掛けた．思わず「きてしまったか」と内心漏らした．近くの taxi チケットカウンターで切符を購入したら，なんと 75 リンギット（日本円約 2,500 円）と高額！？だが乗り込むのは小さく小汚いタクシーだ．降り立つまでの「ボルネオ」のイメージといえば，自然豊かで経済発展の遅れた地域ということだったので，これは意外な価格だった．そうか，仮にもここは州都で，経済発展が著しいマレーシアの一部だと気付く．重たい瞼をかろうじて開けて，街燈が照らす街を眺めながら，揺れる車の意外な心地よさに身を委ねたのだった．

私の研究内容は，人々の生活習慣と肥満についてである．経済発展が急速に進むマレーシアでは，生活習慣病の温床としての肥満が問題視されている．ファーストフードやスナック等の西洋食文化の取り入れや炭酸飲料やシロップをはじめとした砂糖含有飲料の過剰摂取などといった食生活と，自動車の普及

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科